

曲目解説

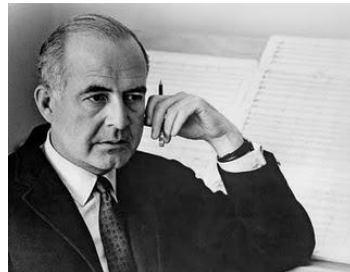
Adagio for Strings

Samuel Barber (サミュエル・バーバー)作曲

弦楽の為のアダージョ Op.11

平佐 修 編曲

バーバーのアダージョとも呼ばれるこの曲は、映画「プラトーン」や「エレファントマン」で使われたことで一般に広く知られる存在となりましたが、この曲がアメリカで有名になったきっかけは、ケネディ大統領の葬儀に使われたことでした。それ以来、訃報や葬送などでの定番曲となりましたが、バーバー自身は「葬儀のために作った曲ではない」と不満を述べていたそうです。しかしながら、この曲を聴いて、喪失の悲しみと受容、慟哭、鎮魂といった言葉を想起することはとても自然なことに思われます。



1936年、バーバー26歳のときに作曲した弦楽四重奏曲第1番の第2楽章を彼自身が弦楽合奏用に編曲したものです。初演は1938年11月5日に、アルトゥーロ・トスカニーニ指揮・NBC交響楽団によって行われました。また、すいぶん後（1967年）になって「アニュス・デイ Agnus Dei」（神の子羊）という合唱曲にも編曲していることから、バーバー自身この曲を気に入っていたのかも知れません。

静謐さのなかに、はりつめた緊張感と深い情感を宿した、20世紀アメリカのクラシック音楽を代表する名曲。この曲がマンドリン合奏によってどのように表現されるかお楽しみください。

TRIPTYQUE for String Orchestra

芥川 也寸志 作曲

「トリプティーク」 弦楽のための三楽章

平佐 修 編曲

作曲者の芥川也寸志は、文豪芥川龍之介の三男として1925年に東京に生まれました。龍之介は1927年に自殺しましたが、也寸志は父の遺品であるSPレコードを愛聴し、とくにストラヴィンスキーを好んでいたのだそうです。のちに彼がソヴィエト・ロシアの音楽に深く傾倒していった背景には、このような幼いころの音楽体験があるのかも知れません。それにしても、当時ばりばりの現代音楽だったストラヴィンスキーが芥川龍之介のレコードコレクションにあったとは、これまた驚きではありませんか。



芥川也寸志は、東京音楽学校（いまの東京藝術大学）に入学、在学中に師事した伊福部昭（言わずと知れた『ゴジラ』をはじめ東宝特撮黄金時代を飾る数々の映画音楽を作曲）から決定的な影響を受けます。その後、黛敏郎、團伊玖磨ら同世代の若手作曲家とともに「三人の会」を結成したり、当時国交がなかったソ連に単身で密入国し、ショスタコーヴィチやハチャトゥリアンの知遇を得て、自分の作品を演奏、出版したりとダイナミックな活動を行い、戦後の日本音楽界をリードしました。また、アマチュアオーケストラである新交響楽団を結成、無給で育成、指導したり、日本音楽著作権協会（JASRAC）の理事長として音楽著作権の確立に尽力したり、テレビでもNHK「音楽の広場」の司会者を務めるなど、作曲家の枠を越え多方面で活躍しました。古くからのクラシックファンには、同番組で見せる彼のダンディな風貌とソフトだが明晰な語り口をご記憶の方もいらっしゃるのではないでしょうか。

さて、この曲は、1953年に当時NHK交響楽団の指揮者だったクルト・ヴェスの依頼で作曲、同年12月、カーネギーホールにて、ヴェス指揮のもとニューヨーク・フィルハーモニックにより初演されました。題名の「トリプティーク」とは3面一組の絵画のことで、芥川が愛聴したポーランド生まれの作曲家タンスマン（1897-1986）の弦楽合奏曲「トリプティーク」（1930）の題名を借用して、3つの楽章を3面の絵画として捉えた作品です。

第1楽章 Allegro (♩ = 138)

三部形式。曲の冒頭から全合奏で突進するような力強い主題が奏される。この主題のリズム音形は、楽章において様々な箇所顔を出す。途中、主題がマンドリン・ソロで奏されたり、副主題を挟んだりしながら進む。中間部で抒情的なメロディが現れるが、低音部の伴奏リズム（冒頭主題の音形）は変化せず、楽章の最後まで勢いを保ったまま進む。

第2楽章 子守歌 (Berceuse) Andante (♩ = 72)

三部形式。娘のために書かれた5拍子の子守歌。1・3楽章と対比をなす非常に叙情的な楽章である。中間部では楽器本体を手で叩く「Knock the body」の特殊奏法が用いられる。一聴シンプルな曲想ながら、細かい管弦楽法が施された聴き応えのある曲である。

第3楽章 Presto (♩ = 152)

ロンド形式。「祭囃子の太鼓のような」と形容される変拍子の主題が弱奏で始まる（作曲当時、近所の神社から聞こえてきた御神楽から想を得たという逸話が残されている）。この後、おどけたような三拍子の第2の主題を挟みながら進み、徐々に加速して曲は一度クライマックスを迎える。全休止の後に、Adagioのゆるやかな第3の主題が出てくる。再びテンポは冒頭の数になり、もう一度三つの主題が圧縮された形で現れた後、最後は冒頭の数で力強く奏して終わる。江戸っ子芥川らしい、泥臭さとは無縁の実に粋な祭囃子となっているといえよう。

Pictures at an Exhibition (complete)

Modest.Mussorgsky(モデスト・ムソルグスキー)作曲

ピアノとマンドリン弦楽合奏の為の組曲「展覧会の絵」

小穴 雄一 編曲

組曲「展覧会の絵」。古今のクラシック音楽の中でも最も人気のある一曲と言っても過言ではないでしょう。原曲(ピアノ独奏曲)は、親友であった画家・建築家のヴィクトル・アレクサンドルピチ・ガルトマン(1834-1873)の遺作展を訪れた時の印象が基になって生まれた作品で、遺作展の4ヶ月後の1874年6月に完成。この曲が際立っているのは、その編曲のバリエーションの多さではないでしょうか。一番有名なのはラベル編曲の管弦楽版ですが、他にも管弦楽、室内楽、吹奏楽、器楽曲など枚挙にいとまがありません。これらの中では、山下和仁編曲、演奏によるギターソロ版はクラシックギター愛好者の間では衝撃的な作品でした。また、この曲の編曲の広がりにはクラシック音楽の枠にとどまりません。エマーソン・レイク・アンド・パーマー(EL&P)の演奏はプログレッシブ・ロックの古典ですし、若干マニアックな世界では、メコン・デルタというバンド(ヘヴィメタル)の演奏も知られています。さらに何と言っても、冨田勲の名を世界に轟かせたシンセサイザー版などなど。そして、我々がマンドリン音楽の世界には、1989年に編曲された小穴雄一版があります。当アンサンブルにとっては、2003年第35回定期演奏会で挑戦した思い出深い曲でもあります。



これだけ多くの編曲を生み出すこの曲の魅力とは何なのでしょう。冒頭と各曲の間に効果的に配置されたプロムナードの印象的なメロディ、それぞれの曲に明快なモチーフがあり組曲として大きな魅力があること、当時としては革新的な和声多用し、それでいて未完成な部分があることなどが、音楽家の感性を刺激するのも知れません。

曲は、展覧会場を徘徊する作曲家自身を表すと言われるプロムナードによってつながれ、特徴のある小品群から成っています。その一連の連鎖は「滑稽さと深刻さ」「叙情詩と無言劇」「速いものと遅いもの」「重いものと軽いもの」など相対するものの均衡を保つように巧妙に組み立てられています。同時に全体としては「卵の殻をつけた雛鳥のパレエ」を中心にシンメトリーな構造をとっています。「グノームス」と「バーバ・ヤガー」はおとぎばなし、「古城」と「カタコンブ」は歴史的なもの、「テュイルリー」と「リモージュ」はフランスの暮らし、「ピドロ」と「ゴールデンベルグ」はポーランドの暮らし、というように、それぞれ共通性をもって対照的に配置されています。

プロムナード

展覧会を徘徊するムソルグスキー自身を表現したといわれ、楽曲の合間に挿入され、楽曲から次の楽曲へ移る作曲家自

身の心の動きを巧みに描写している。4分の5拍子と4分の6拍子が交差する素朴で力強い主題はロシア民族音楽の特色をもっており、明らかに複合様式の聖歌の模倣と考えられる。

第1曲 グノームス（こびと）

小さなこびとが曲がった脚で不器用に歩く様子を描いている。ガルトマンは芸術家協会のクリスマスツリーに飾るために寓話に出てくる、くるみ割り人形のおもちゃをデッサンした。ムソルグスキーの音楽はグロテスクなこの土の精のキャラクターを巧みに描写している。

第2曲 古城

イタリアのどこかにある中世の城の前で、トゥルバドゥール（吟遊詩人）がひとりたずみ恋のうたを歌っている。ガルトマンの作品カタログには、フランスの古城のスケッチは残っているが、イタリアのものは無いようで、このギター（あるいはリュート）伴奏によるセレナーデの旋律は、明らかにロシアの無言劇風で、イタリアからの引用はそのシチリアーノのリズム形態に留まっている。

第3曲 テュイルリー（遊びの後の子供たちの喧嘩）

この小さなスケルツォは、パリのテュイルリーの庭で子供達が家庭教師と戯れる様子を描いた作品がもとになっている。ガルトマンの絵は失われたが、作品リストにはパステル画のスケッチが登録されていた。子供たちの喧騒を描くめぐるしい主題にはじまり、中間部では、なにやらねだるような甘い旋律が現われる。やがて、その喧騒も遠くのほうへ消えて行く。

第4曲 ビドロ

2頭の牛役に引っぱられた巨大な車輪を持つポーランドの四輪牛車が忽然と目の前に現われる。牛車はやがて段々遠くに去っていく。Bydloには「役畜」「農奴」の意もある。どっしりとした伴奏に乗って歌われる何か重く引きずるような主題は、压制下にあえぐ農奴の呻きの様でもある。

第5曲 卵の殻をつけた雛鳥のバレエ

原画は、サンクトペテルスブルグのマリンスキー劇場で上演されたバレエ「トリルピ」の舞台衣装用に書かれ、「小さな子供達がカナリヤのヒヨコになってこの衣装をつけて叫び声をあげる」という場面で使われた。題材はフランスの小唄「トリルピまたはアジューの妖精」から引用された、きわめて繊細な描写音楽である。

第6曲 ザムエル・ゴールデンベルグとシュムイレ

ガルトマンの絵はポーランドのサンドミールでスケッチした2枚の絵。1枚は金持ちで横柄な態度のユダヤ人。もう1枚は貧しい酔っ払い風のユダヤ人で、寒さのせいか、お酒のせいか全身ガタガタ震えて怯えているかの様。ムソルグスキーはこれら2枚の絵を組み合わせると一つのドラマに仕立て上げた。最初はリッチなゴールデンベルグの登場。彼は何時だって尊大ぶってばかりちらしている。やがて貧しいシュムイレが黄色い高い声でべちゃくちゃ喋りだす。しだいにゴールデンベルグの威圧的な声が聞こえて、シュムイレを圧倒してしまう。

第7曲 リモージュの市場

リモージュの市場に集まったフランス女達が賑やかに他愛のないおしゃべりを始めた。ガルトマンの絵には、これに該当するものは無いと言われているので、これはムソルグスキーの創造力の産物と言える。

第8曲 カタコンブ〜プロムナード

カタコンブはローマン墓地のこと。プロムナードには「死者とともに死者の言葉をもって」という副題が添えられている。この曲は亡きガルトマンを偲ぶレクイエムになっている。ガルトマンの絵にはパリのカタコンブの内部を案内されている姿と共に右手には頭蓋骨の山が描かれている。

第9曲 鶏の足の上の小屋崖（バーバ・ヤガー）

ガルトマンのスケッチには鶏の足の上に小屋の形をした置時計が書かれている。ムソルグスキーはそれにほうきに跨って空を飛び回るバーバ・ヤガー（妖婆）に空想を巡らした。バーバ・ヤガーはロシアの民謡に登場する魔女で、森の奥深くに潜んでいる。帽子をかぶり彼女が持っている鶏の足を振り回して人々を不吉な運命へと導いていく。迷子になった子供を誘拐しては食べてしまい、その骨を砕いては巨大な漆喰に埋めてしまう。中間部の静かな部分は、なにかとつもなく巨大な時計が刻む不気味な音の模倣の様である。

第 10 曲 ポガティルの雄大な門（首都キエフにある）

ポガティルとは古代ロシアの英雄たちのことで、キエフ市はその英雄を祭る凱旋門建設のためのデッサンを公募した。原画はその時のもので、スラブ風のアーチ状の屋根をもつ古ロシア的な石造り様式で、門には鐘楼と教会がついている。音楽は壮大な ff の中に教会の鐘が轟き、聖歌隊の歌がこだます。「栄光のロシア」を見事に再現し、ロシア的なるものすべてを凝縮させて曲を閉じる。

(引用文献：アンサンブル・アメデオ～第 10 回・第 16 回定期演奏パンフレット 音楽之友社～「北欧の巨匠」)

マンドリン合奏への編曲の試み

1989 年マンドリン奏者の青山忠氏の依頼により小穴雄一氏が編曲、クリスタル・マンドリン・アンサンブル第 6 回定期演奏会で初演。センセーショナルな話題を呼んだ。原調は E♭ が基調で、当初は合奏効果が懸念されたが、マンドリンのトレモロは思いのほかムソルグスキーの憂鬱な旋律に良く合い、ピッキングは歯切れのよい楽想にもマッチした。マンドリン合奏版はその後幾度か改版され、当アンサンブルでは、2003 年第 35 回定期演奏会にて第 3 版を演奏した。今回は、ピアノとマンドリン合奏のために、当アンサンブルより新たに編曲を委嘱、本邦初演となる。

編曲者紹介 小穴 雄一（おあなゆういち）1957 年東京生まれ。慶応義塾高等学校入学後マンドリンを始める。顧問の服部正氏に音楽の喜びを享受。マンドリンを竹内郁子女史に師事。指揮法と楽典基礎を久保田孝氏に師事。4 年次に常任指揮者の服部正氏の副指揮者を務める。卒業後は会社勤めの傍らアンサンブル・アメデオの指揮者兼編曲者、プレクトラム・ソサエテイの指揮者兼編曲者、慶応義塾マンドリンクラブの指揮者として精力的に活動。著書にドレミ楽譜出版社より「マンドリン教本」「マンドリンヒット曲集」がある。氏の編曲は常に独創的な発想から、ポピュラー、クラシックの広い分野でマンドリンの表現力の可能性を追求しており、それこそ「世界に一つしかない」オリジナル曲に仕上げている。今回、当アンサンブルの為に、「展覧会の絵」を新たにピアノとマンドリン弦楽合奏のために編曲して頂きましたこと、誌面をお借りし、心よりお礼申し上げます。

定期演奏会に思う～福シン 50 年

常任指揮者 松永 恒一

バーバーの「弦楽の為のアダージョ」は、要人の葬儀や告別式でしばしば演奏される。この曲は本来、弦楽四重奏曲の第 2 楽章であり、作曲者は葬儀等で演奏されることに大いに不満があったというのが、映画音楽等にも使われ、その沈痛でむせび泣くような曲調が広く知られるところとなった。2 分の 4 拍子で書かれた譜面は長く伸びた全音符や 4 分音符が並び、一見すると演奏するにさほどの困難を思わせない。しかし、奏者にとって腰の据わった表現力はもちろん、自らを律し音楽を見失わない精神的な持続力が終始要求される難曲である。この曲には、やはり人の心の奥にしみ入る想いを伝える何かがある。今年は春先に国の根幹を揺るがす未曾有の震災と事故があり、また夏の終わりには台風による大きな被害が相次いだ。いずれも復旧への道半ばであり、多くの困難に直面していることは周知のとおりである。福シンがこの曲を定演のプログラムに選んだのは昨年の暮れであり現在の状況は思いもよらないことであったが、音楽はその時々で表情を変える。本日は冒頭で演奏し、復興への祈りとしたい。

さて福シンは、今年創立 50 年を迎えた。現在の団員は文字通りの老若男女。職業も住むところもさまざまであり、演奏活動へのモチベーションもさまざまである。常任指揮者の大切な仕事は、そういう団員の個性を尊重しつつ、全体として一つの揺るぎない音楽表現に持っていくことであるが、当然、一朝一夕にできることではない。この合奏団が半世紀を超えようとする歴史を積み上げていることは、既に一つの市民文化として根付いていると言っても過言ではないだろう。ささやかでも文化の一翼を担う以上、社会的責任も生じる。各団員は定演に向かって可能な限りスケジュールを調整し、毎回〈一期一会〉の思いで合奏練習を重ねる。追い求めるものにはなかなか追いつかないが、福シンの音楽は、安定し完成することのみを目指していない。演奏はいつも新しく、同じ演奏は二度とできない。そして定演のステージでは空前にして絶後の音楽に挑む。それが福シンの魅力である。この先の 50 年を夢見ることも楽しいが、まずは 51 年目に向け全力で取り組むこととしたい。（2011 年 10 月）